

続きまして、介護ロボット導入までの道のりと事例と題しまして、パネルディスカッションを開始いたします。

本日も登壇の皆様をご紹介させていただきます。

パネリストに、介護老人保健施設雪見野ケアセンター事務長、横山新様。

特別養護老人ホーム杏樹苑爽風館施設長酒本隆敬様。

介護老人保健施設蓮田ナーシングホーム翔裕園事務長、江田俊雄様。

なお現職は特別養護老人ホーム翔裕園事務長でおられますが、導入当時に携わりました関係で、本日も登壇いただいております。

ファシリテーターに、株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所、情報未来イノベーション本部、先端技術戦略ユニットマネージャー、足立圭司様にご登壇いただきます。

ここからは足立様に進行をしていただきます。

それでは足立様、よろしくお願いいたします。

はい、ありがとうございます。

パネルディスカッションのお時間としたいと思います。

私は今ご紹介いただきました、エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所の足立と申します。

今回ファシリテーターを務めさせていただきます。

よろしくお願いいたします。

まず最初にパネリストの皆様には施設の概要についてご紹介していただきたいというふうに思います。

まずは雪見野ケアセンターの横山様、よろしくお願いいたします。

介護老人保健施設、雪見野ケアセンターの横山と申します。

私どもの施設は、所沢市にあります。

開設から今二十年弱たとうとしています。

定員が100床の多床室が中心の施設になります。

今回導入のほうは、シルエット見守りセンサーをさせていただきました。

今日このような貴重な場をいただき、ありがとうございます。

よろしく願います。

はい、ありがとうございます。

続きまして杏樹苑爽風館酒本様、お願いいたします。

はい。

埼玉県の入間市にあります社会福祉法人杏樹会が運営しております、

特別養護老人ホーム杏樹苑爽風館の酒本と申します。

私の施設は、2015年オープンしまして、五年ちょっとの施設になっております。

ユニット型特別養護老人ホームとして、長期入居の方が百名お暮らしになれる施設でございます。

今回、この事業で導入させていただきました

介護ロボットは、見守りセンサーの眠りSCANという、パラマウントベッド社製のセンターになります。

今日はどうかよろしく願います。

はいありがとうございます。

続きまして蓮田ナーシングホーム翔裕園、江田様お願いいたします。

はい。

皆様こんにちは。

私は社会福祉法人元気村で、蓮田市にあります介護老人保健施設蓮田ナーシングホーム翔裕園で働いている江田と申します。

私たちの施設は、平成9年にオープンしまして、従来型の定員が百名の施設となっております。

二階が50名、三階が50名の方へのケアサービスを行っております。

今回導入した介護ロボットにつきましては、コミュニケーションロボットのPALROというものを導入させていただきました。

皆様どうぞよろしくお願いいたします。

はい、ありがとうございます。

それではファシリテートディスカッションに入っていきたいと思いますが、今回のテーマは、介護ロボットの導入までの道のりと事例ということとなっております。

そして今日お集まりいただいたお三方の方は、各施設で管理者を務めてらっしゃる方々でございますので、管理者層からの観点でお尋ねしたいというふうに思います。

まず、昨年度ですね、埼玉県の事業におきましてモデル事業としてですね、介護ロボットをそれぞれの施設で導入されたと思います。

管理者としての立場で、どのようなことをこのプロジェクト上で気をつけられて、配慮されたのか、どんなことに工夫があったのか、感想も含めて一言ずつお伺いしたいと思います。

まず、横山様からお願いできますか。

はい。

私が一番気をつけてたのは、職員が欲しいものを、何とか導入できるようにってことだけ考えていました。

なので、こういったものが、プロジェクトの途中で選定されるのか、そのあたりは一緒に会議には出ていましたが、なるべく口を出さないようにして、できれば職員が決めてもらうという形だけ気を付けてました。

実際、今回プロジェクトに参加させていただいて、たまたまシルエット見守りセンサーになりましたが、ただその導入過程、ですね、課題の解決方法とか、それを実際にどうやったら職員に周知してっていうような過程の部分で、すごく施設としては財産だったのかなと思います。

なので、プロジェクトに参加させていただいて、私の立場で言うと、すごくよかったかなと思っています。

はい、ありがとうございます。

酒本様はいかがですか。

はい。

私の施設はプロジェクトのチームを、コンパクトなチームで実施するように心がけました。

施設全体で行って、薄くなってしまうよりは、小さなチームで成功体験を積み上げていくというようなことを、行っていくほうが良いのかなと思って、毎週1回のミーティングに必ず参加させていただいて、そこで、どちらかというやつぱり業務が増える中でネガティブな発言が出てくることも多かったですけれども、本当に少しでもいい体験、いい結果が出てきた時に、その子たちのやっていることを、承認して承認するという形で、チームを盛り上げていくということを心がけました。

はい。ありがとうございます。

江田様いかがですか。

はい。

私たちが、法人で介護ロボットを、今後は積極的に導入していこうという動きがありまして、昨年度、介護ロボットの導入促進

事業に参加させていただきました。

研修会の中でですね、まずその時はどのロボットを入れようっていうのはまだ決まっていなかったんですけども、気づきシートというものをですね、ご提案いただきまして、施設に戻って、職員全員にですね、気づきシートっていうものを書いていただいて、私たちにとって今何が必要なのかっていったところを、みんなで考えてみたところ、やっぱり業務に追われてしまってご利用者さんの時間がですね、なかなか取りにくいところがありまして、本来レクリエーションとかもですね、

長い時間を取ってやらなければいけないっていうのがあるんですが、私たちの場合、どうしてもその時間が短くなって他の業務を優先しようとかいうことにどうしてもなっていたっていうのがありましたので、今回、コミュニケーションロボットのPALROを入れることで、その改善をレクリエーションの長い時間をできるレクリエーションの時間を取れるようにしたっていうのを、試みました。

導入から一年が経ちまして、このあとも申し上げるんですが、PALROそのものもたらしてくれた効果というのがとても大きかったと思います。

はい、ありがとうございます。

本当に三者三様のといいますか、いろんな関わり方、工夫があったんだというふうに思います。

では、逆にですね、プロジェクトを進めていく中で、常に順調だったわけではないと思うんですね。

何かプロジェクトのメンバーの方が困られたようなことも十分あったかと思うんですが、そういったこと、どんなところに困ったのか、プロジェクトが頓挫してしまった場面があったのかどうか。

そういったところをお伺いできればと思います。

これもおそらく、三者三様のお答えかなと思いますが、いいですか。

はい。

横山さんからお願いします。

はい。

そうですね、やっぱり今までいろんな、過去ですね、機器とかっていうか、物品も含めて導入しようって時にやっぱりその、やらされて

る感が、ずっとありました。

あったんだと思います。なので、自分たちが率先してっていう環境をですね、やっぱり

私含めて管理者が作っていかなくちゃいけないのかなってところが、自分としてはすごく、どういうふうに空気を作っていくのかっていうところが苦労したのと、あとやっぱり実際に職員が導入しましょう、と

いうことになった時に、段取りですね、あと時間をどうやって作るかっていうところがやっぱりありました。

その時間をやっぱり、トップダウンではないですけど、そこはやっぱり決断を私がしないといけないかなってところは、場面としてありました。はい。

はい、ありがとうございます。

酒本さんいかがですか。

はい。

先ほども少し申し上げましたが、ネガティブというよりは、介護ロボットといっても道具なので、使っている中でそれが正しいことなのか、成功体験なのかがわからない、

というような、スタッフの意見がすごく多かったですね。

ですから、そしてモチベーション落ちてきている時に、それってすごい成功体験だよねとか、

それが改善されたものなんじゃないとか、当たり前のようにやっていることはいいことだというふうに思えない時が出てくるので、そこをいいことができてるよというふうにしてあげるということが、一番のポイントだったと思っています。はい。

モチベーションをいかに保ってあげるかっていうところに配慮されたということですね。

そうですね。

実は、1回他のチームでやってみると、購入台数を閉じたチームでやっていたので、別のチームに明け渡して、途中からプロジェクトを変えても大丈夫だよって話をしたんですけど、

結果その介護機器自体がなくなることには皆恐怖を感じて、やです、私たちがやってることなので、このまま頑張りたいてすってような話になって、じゃあ、今頑張ってることを、本当に誇れるものなんだから、胸に張ってやったんでいいんじゃないのってというような話をしたのが、ちょうどプロジェクトの半分ぐらいの時だったと思います。

なるほど。

はい。

ありがとうございます。

江田さんはいかがですか。

はい。

そうですね、やっぱりどうしても介護ロボットって形になって、ロボット機械っていう形になりますと、職員の中にもどうしてもご高齢の方とかですね、私機械が苦手なんです、使いたくないですっていう意見がたくさんあったりもしました。

ですので介護ロボットを、いくつか私たちも導入はしてるんですけども、正直見た目がかわいいものでちょっと選んでみて、職員の介護ロボットに対する意識、ハードルの位置をですね、少し低くしてもらおうかなっていうことも考えたりもして、やってみましたね。

なるほどありがとうございます。

その、メンバーの方々っていうのは、普段の業務がある中で、このプロジェクトに携わる時間を捻出しなきゃいけないということで、ある意味業務負荷が上がるような場面もあったかと思うんですね。

そういったプロジェクトに対して前向きに取り組んでいただけるような職員の方を募って、プロジェクトチームをしたと思うんですが、具体的にはどのような方をプロジェクトチームにこうアサインしていったのか、何か観点とかですね、こういった観点で選びました、みたいなものがあれば、教えていただきたいんですが。

酒本さんいかがですか。

はい。

実際に機器を使う実践者としては、ブレインングマネージャーであるユニットリーダーを中心に、チームを組みました。

ただ、プロジェクト全体という形でいくと、県の事業でもありますので報告書をあげたりとか、いろんなことがあります。

そういった時に、パワーポイントの使い方とか、アンケートの作成だとかということを得意としている、生活相談員だったりとか、あとは眠りSCANはどちらかという見守りセンサーでありながら、医療機器に近いところもありますので、看護師などのプロジェクトの中に入れて多職種連携で支えられるようなチームづくりをしました。

なるほど。

ありがとうございます。

江田さんいかがですか。

はい。

私たちの場合はコミュニケーションロボットでレクリエーションの補助っていう形もありましたので、まずは主として、この介護主任を中心としてまとめました。

二階と三階フロアといったところがありますので、二階三階の中で、お手伝いをしてくれる方、機械にね、強い方の発信力の強い者といったところで、メンバーを選出しまして、あとは私が、その間に入りまして、ミーティングを開いて、改善していく、改善していく点を見つけていくっていった形をとってました。

なるほど。

ありがとうございます。

横山さんはお伺いしていいですか。

はい。

子どもの施設は、各課に主任その下に副主任という形でいるんですが、副主任のほうが中心で、メンバーを組みました。

あと併せて実際の現場で一生懸命やっていたいる職員の方を選ばせてもらいました。



やっぱり、誰のためにやるのかって考えた時には現場の職員がっていうところが中心になるかと思うのでそういったメンバーづくりをしたのと、あと併せてですね、やっぱり記録にまとめたりとか、外部との、情報、調整ですね、そういったことが必要になるっていうこともあったので、事務の主任のほうも含めてメンバーに入れさせてもらいました。

ありがとうございます。

私もこのモデル事業をはじめ、いろんな施設でお手伝いさせていただく時のメンバー選びってのは非常に重要だなと思ってまして、

特にそのプロジェクトリーダーの方、これは人材育成の観点も含めて検討すべきだなと思ってんですが、そういった観点からですね、プロジェクトを通してどのように職員が変わっていったのか、それをこう俯瞰的にある意味見られている中で、その職員のプロジェクトに関わった職員の変化っていったものをどういうふうに捉えられましたでしょうか。

横山さんいいですか。

はい。

そうですね。

一人一人もそうですし今回リーダーになっていただいた副主任もそうなんですが、やっぱり責任をきちっと感じてくれるのかなあと思いました。

それは、普段の仕事もそうだと思うんですが、ただ、こういう改めてプロジェクトって形で立ち上げて、全職員に周知するっていう中では、やっぱり、彼女はすごく一生懸命、責任感を感じてくれて、それにすごくこたえてくれるようにだんだん増えてきたなと思います。それ言う機会が、やっぱりきちっと形として現れたのはすごくよかったかなと思うんです。

なるほど。

酒本さんいかがですか。

はい。

私のところはチームアセスメント力の向上という形ですかね。

いわゆるチームビルディング期における揺り戻しとか過渡期とかいろいろあったと思うんですけども。

普段から多職種での連携ということで、チームで話をさせている部分に、プラスしていわゆる、次に進むための合意形成をしっかりと持てるようになったのが、そこが介護であろうが、看護であろうが相談であろうが、きちっと話ができるようになっていったっていうのは、すごく今回プロジェクトを入れて大きな成果だったんじゃないかなというふうに思ってます。

ありがとうございます。

江田さんどうですか。

はいそうですね。

やっぱり最初は介護ロボットといったところで機械に強い者たちをというところで進めてはいたんですけども、やはり現場に広めていくって形になりますと、どうしてもその介護に強くない、あ介護じゃないや、機械に強くない方でも、触れていくことで、だんだん操作に慣れて、その方がまた発信力の強い方であれば、その人が、より触ってない介護ロボットに触ってない職員さんたちに伝えていくことができるっていうのが今回わかりましたので、やっぱり、わかるものがまずは、発信力のある方たちに伝えていくことということと、あとは発信力のある方たちがまた全職員にですね、広めていくっていったところを、少しずつではあるんですけど進められたことがよかつたんじゃないかなとは思いますが。

ありがとうございます。

やはりこの介護ロボットの導入っていうことをテーマとして材料としてですね、プロジェクトチームを一つ、一本終わらせる。

最初から最後までやってみるっていうことで、その過程で改善活動みたいなものを、組織の経験として蓄積していく。

これが非常に重要な観点の一つなんじゃないかなというふうに私も思って、取り組んでおります。そしたら少し介護ロボットのほうに少しお話を移したいと思います。

介護ロボットを、今現在ですね、非常に多くの種類の介護ロボット、世の中に上梓されてますが、その中で介護ロボットいろんな六分野に分かれております。

後程ご紹介しますが、いろんな分野に介護ロボット分かれておりますが、そのロボットの категорияに注目した、その理由と伺いますか、どういった業務の分析があってこのロボットを選んだのか。

ロボット選びのところについてコメントいただけますか。

江田さんどうでしょう。

はい。

そうですね先ほどもちょっと申し上げたんですけども、介護ロボットっていったところで、本当にロボットの形をしてるものを選んでみようかっていう意見もあったりはしましたね。

実際にロボットの選定の中で、ご利用者さんも触れて、職員もあまり、なんでそれね、大きくないほうがいいかなといったところで、サイズとあとはその、声がとてもかわいらしい声をね、PALROは発しますので、その声で、ご利用者さんであったり、職員だったりちょっといやされるっていうのを目的としてちょっと選んだっていうのは、ありますね。

ありがとうございます。

酒本さんのところは、どんなロボット選びをされましたか。

はい。

実際に使うのは介護職員なので、介護職員の困っているところ問題点というのを、ディスカッションする形で上げてきました。そこから、ユニット型の施設の基準配置で2ユニット1人で、20人の方を夜間帯に見ている。

また若い施設ですので、無資格の方、未経験の方もいらっしゃいました。

そういった方は、夜勤の不安をどう軽減していくか、精神的不安の軽減に寄与できるようなロボットがないか、また看取り期の方も多くなっていますので、そういったところで、夜間に看護師の配置がオウンゴールしかありませんので、そういうのも精神的な負担になっていく中で和らげるために、こういった機械を入れていっていかっていうことを、重要視して、選定してきました。

ありがとうございます。

横山さんところも見守りセンサーでしたね。

どんなことを、観点として選んできましたか。

そうですね。やっぱり、最初に挨拶したように、結果的に見守りセンサーになったというのが本当です。

なので、その課題をどういうふうに出していくかってところで今回、エヌ・ティ・ティさんのほうでも協力していただいて、まず職員が何を負担に感じているのかっていうのを、洗い出してですね、書いてもらって、それをすべて貼り出して、その中で、私どもはたぶん三つぐらいあったかと思うんですが、見守りセンサーと、

それから身移乗介助のロボットですね。

あとたぶんレクリエーション認識するロボットっていう三つがたぶん出てきたと思います。

その中で、やっぱり職員が一番望んでいるのはその見守りっていう部分だったので、まずそこから、その次に機械の選定って形で、何社かのものを、考えたっていう形になります。

ありがとうございます。

お三方とも共通してるなと私思ったのが、やはりその介護ロボットありきで、このロボットを導入すること自体が目的ではなくて、ちゃんと現場を観察し、そして課題を抽出して、この課題を解決するための一つのツールとして、介護ロボットを導入してらっしゃる、ここが大きな共通点だったと思います。

本当に介護ロボット、補助金があるから、先ほど中村施設長の講演にもありましたけども、補助金があるから、介護ロボット入れましょうではなくてですね、普段からの課題を一度整理して、それを解決するための介護ロボットってどんなものがあるんだろうかといったようなところが、介護選びの、まず最初の一步なのかなというふうに思います。

ありがとうございます。

介護ロボットの情報ってどのように収集されましたか。

例えば展示会やウェブや、それともメーカーさんに尋ねるといったこともあろうかと思いますが、皆さんどんな、誰がどのように、その情報収集にあたりましたでしょう。

酒本さんどうですか。

はい。

もちろん展示会ですとか、インターネットを通じてとか、あとは国のホームページですかね、

とか県のホームページの中から、介護ロボットの認定を受けている機器の名前を比較してきて、どういったものがあるのかなというような形から選んでいたと思います。はい。

ありがとうございます。

横山さんどうですか。

はい。

そうですね、やっぱり今、杏樹苑さんがおっしゃったように、そういった形なんですけど、一番大事かなと思ったのは絞り込んでいく中で、いっぱい実際に物を見るってことかなあと思いました。

なのでパンフレット等もしくはホームページ等でですね動画でも流れるんですが、私どもは二つか三つほど施設導入している施設を見に行きまして、こんな感じでやってるんだっていう形を、

職員がイメージしやすいっていうか、見ることで、もっと具体的にイメージしやすくなったのかなと思います。

なるほど。施設見学に行かれたってことですね。ありがとうございます。

江田さんどうですか。

はい、そうですね、やっぱり

情報を一番見れるのは福祉機器展とかそういったところだと思いますので、管理者ってある私たちであったり、職員の、行きたい人を募ってですね、まずは行ってきて、どれがよかったっていうのを資料とかを持ってきてもらって、そこからこれがいねっていうものがありましたら、業者さんに連絡を取って、デモで導入するっていう、デモ導入をして実際、触ってみるっていうのをやったりしてますので、その中でやはり意見が上がって、いいものがあれば、他の施設とかの情報も仕入れながら、導入検討していくっていう形になりますね。

今は本当にメーカーさんが親切にですね、デモをしてくれたりとか本当に勉強会をしてくれたりとか、手厚いフォローが受けられると思います。

そういったところの、このハードだけではなくてソフト面も、介護ロボットの選び方の一つの観点ではないかなというふうに思っています。

ありがとうございます。

介護ロボット、今ですねまだまだこれから普及していかなくちゃいけないというところで、介護ロボットといいますとやっぱりアトムとかドラえもんとかいう人型の、ロボットを想像する方もまだまだ多いようなんです。✖

皆様の施設のスタッフの方、プロジェクト前にですね、ロボットっていう単語に対してどんなイメージを持ってらっしゃるか、ちょっと。

教えていただければと思います。正直に教えていただければと思いますが。

江田さんどうですか。

そうですね。

やっぱり先ほども申し上げてしまったんですけども、介護ロボットって聞きますとやっぱりどうしても日本人はドラえもんとか鉄腕アトムのイメージとかがあったりしますので、そういう人型のもってというのがあったかと思います。

実際選んだのもちょっと人型のものを選んだんですけども、やはりすごくそのロボット、見た目も可愛いらしかったんですけども、

に対して、職員もご利用者さんもその見た目に関してはもう全然文句なしで形で言っていたら、非常に受け入れてもらいやすかったのがありましたね。

ありがとうございます。

横山さんどうですか。

はい。

そうですねやっぱり職員の中には、介護ロボットって何っていうところから、スタートしてましたので、それこそドラえもんとかアトムをイメージしてる職員もいました。

こういった見守りのセンサーもそうなんだっていうことがですね、やっぱりわからない、知らないっていう職員のほうは、当初多かったと

思います。

なるほど。

酒本様お願いします。

はい。

私のところは、この事業の一年前に装着型の介護ロボットを導入するにあたって、全職員向けに勉強会を開きました。

その時にある女性スタッフに、装着型の介護ロボットだと言ってるにもかかわらず、朝起床の声かけに行きカーテンを開けてくれるようなロボットなんですかと聞かれたり、あとそれこそロボコップのように全身に着込むようなロボットスーツみたいなのを想像しているスタッフもいて、このままじゃいかんと思って、介護ロボットのイロハの勉強会をしたのを、もう二年半ぐらい前になるんですけど、すごく今質問聞いて思い出しました。

ですから、先入観というのはすごく強いものなんだなというふうに思っています。

そうですね。

私もお手伝いさせていただく時にいつも介護ロボットって人型の形してるものばかりではないんですよってところから、お話を始めたりします。

まだまだ、こういう普及をしていくにあたっては、介護ロボットってそのものがどんなものをしているのか、どんな機能があるのか、どんな形をしているのかといったところをご紹介していくというのが、非常に急務といいますか、重要だなというふうに思います。

それでは、もう少し伺いたいと思います。

介護ロボットを導入することで例えば、職員の方のスキルが、介護のスキルが低下してしまわないかといったようなご心配を、伺うことがあります。

この点についてちょっとどんなご意見でしょうか。

江田さんどうですか。

スキルの低下ですか。

それは私たちが導入したPALROを使う限りではないかなってのは正直あります。

むしろ、レクリエーションの補助をしてくれるっていう中で機能の中に体操が本当100個以上含まれていたり、歌に関しましてもですね、もう日本の元々歌われている歌だとか、たくさん買っていたりっていうのもありまして、その中から、若い職員さんだったりするとあの歌知らなかったなっていうので、一緒に聞いて一緒に利用者さんは逆に歌えますので、こういう、こういうふうなメロディーなんだっていう形でむしろ歌を覚えた体操覚えたっていうのがたくさんありましたので、むしろスキルの向上に繋がったのではないかなと感じました。

酒本さんいかがですか。

はい。

私も同様に思ってるんですけども、介護ロボットといっても、どこまでいっても人が使う道具なので、例えば見守りセンサーの眠りSCANであれば、それを使いこなすことによって、根拠に基づいたアセスメントができるように逆になってきます。

またこの事業とは別にうちで使っております、装着型の介護ロボットのハルですと、きちとした体の動きを使ってトランスができないと、起立筋に反応している関係で、うまく作動しません。

正しい介護を体に教えてくれる、気づきを教えてくれるのも介護ロボットのひとつだと思っています。

ありがとうございます。

横山さんお願いします。

そうですね、ちょっと私の考えになっちゃうのかもしれないんですけど、やっぱり介護を含めてですね、介護もそれから相談業務も含めてやっぱり対人援助職だと思ってますんで、そういう意味では、何かロボットが、具体的にこうやってくれる、介護してくれるっていうものではないってことを、ちょっと今回勉強させてもらったかなと思います。

むしろ、人がですね、人を介護するっていうところに補助的なものとして、そのロボットを活用するっていう視点の方が、正しい

って思ってますので、そういう意味では職員の介護技術はですね、スキルが下がるとか、そういったことは特にないかなと思いました。



なるほど。

ありがとうございます。

大事なことを教えていただいたと思いました。

介護ロボットって言うてもですね、その人に代わって取って代わって介護をするっていうわけではなくて、介護するのはあくまで人であって、その実現したい介護の補助として道具としてですね、介護ロボットが存在するんだと思います。

これはおそらく技術がどんなに発展しても、おそらくその考え方は非常に重要なんだろうなと、むしろ重要さを増してくるのではないかなというふうに思っていて聞いておりました。

ありがとうございます。

そろそろお時間のようですのでパネルディスカッションを終わりたいと思います。

ありがとうございました。

足立様そしてご登壇の皆様、ありがとうございました。

続きまして、すでに多くの施設で活用されているパラマウントベッド株式会社、株式会社aba共同開発のHelppadをご紹介します。

Helppadは臭いで尿と便を検知する業界初の排泄ケアシステムです。

おむつを開けずにおむつの中が見たいといった、介護施設の方の会話の中から生まれた製品になっております。

おむつ交換の空振りを減らし、一人一人に合わせた最適なタイミングでの、排泄ケアを届ける。

そういったことをサポートできる機械になっているのかなと思います。Helppadは、体に装着することなく、お使いいただけるセンサーになっております。

体に何かセンサーを貼りつけることによって起きる肌への負担でしたり、装着の手間、そういったものがないように、開発のほうをさせ

ていただいております。

また併わせて尿と便、どちらも検知できる、そういったものが、他の製品にはないHelppad独自の視点となっております。

マットレスの上に敷かれている、こちらのシートの上にご利用者に寝ていただきますと、その排泄の臭いを吸い込みまして、ポンプのほうで検知をいたします。

こちらのポンプのほうから無線を使って、パソコンの方にデータが飛ぶ。

そういった仕組みになっております。

また定時で入られるようなおむつ交換のタイミングに関しましても、こちらの手元スイッチで、簡単に記録することができます。

おむつ交換の際にその方が尿のみ、排泄があったのか、それとも便のみ排泄があったのか。

また、尿と便どちらも排泄があったのか。

また、排泄がなかったのか。

こういったものを、その場で、簡単に記録をする。

そういったものができるようになっております。

Helppadにできることは、大きく分けて三つございます。

まず一つ目が、排泄をアプリでお知らせする機能です。

ネット上のセンサーが排泄を検知するとアプリで表示します。

また、システムで漏れ出しのリスクを判断してお部屋に行く準備をご提案します。

二つ目がケア記録の電子化の機能です。

Helppadは排泄記録や下剤記録を見やすい色分けの表で表示します。

また、おむつ交換を実施した、その場で簡単に記録することができます。

最後に解説をコントロールするのではなく、パターンを使うといった使い方です。

Helppadを敷いておだけで、データを貯めて、利用者様それぞれの排泄パターンを見える化することができます。

また、排泄パターンをもとに、その方に合った適切なおむつ交換のタイミングを提供します。

Helppadは、ロボティクスベンチャーとわが社との共同開発製品になります。

Helppadを活用することで、最適なタイミングでおむつ交換に入ることができるようになります。

そうすることで、業務が効率化され、ご利用者一人一人に寄り添いお話をするといったことに時間が使えるようになるのではないのでしょうか。おむつの中がわかると介護の現場が変わる。

そう信じてHelppadの進化を続けて参りたいと思います。